九州産業大学国際文化学部紀要　第33号　45－70（2006）

マリーナ・カー『ポーシャ・コフラン』論

河　野　賢　司

本紀要前号の拙論「マリーナ・カー『猫ヶ沼のほとりで』論」に引き続き，マリーナ・カー（Marina Carr, 1964-）の戯曲『ポーシャ・コフラン』[1]（*Portia Coughlan,* 1996）を取り上げる。発表順としては『猫ヶ沼のほとりで』に先立つこの作品は，ダブリンの国立産科病院から委嘱を受けて執筆され，1996年3月27日ダブリンのピーコック劇場で初演された作品で，同年5月にはロンドンのロイヤル・コート劇場でも上演されている。

(1)『ポーシャ・コフラン』の梗概

時は現在。アイルランド中部地方のベルモント渓谷（Belmont Valley）が舞台。季節は「蒸し暑い夏」の日（第1幕第4場のフィンタンの台詞より）。

第1幕　第1場　コフラン家の居間。午前10時。ポーシャは寝間着姿のまま立ってブランディを飲んでいる。舞台の片側はベルモント川で，ちょうど15年前に死んだ双生児のゲイブリエル（Gabriel Coughlan）が歌いながら佇んでいる。ふたりは奇妙な様子で無意識のうちに互いの姿勢と動作を鏡のように映し出す。

朝方出勤したはずの35歳の夫ラフィアル（Raphael Coughlan）が戻ってきて，家事や育児を怠る妻に苦言を呈する。この日はポーシャの30歳の誕生日で，彼はプレゼントにダイヤモンドのブレスレットを用意していた。5,000ポンド（100万円相当）もする高価な代物だが，ポーシャの趣味ではないらしい。夫はまた職場へと急ぐ。ポーシャはCDをかけてゲイブリエルの歌声をかき消し，退場する。

第2場　ポーシャの母方の伯母マギー・メイ[2]・ドーリー（Maggie May Doorley）とその夫センチル（Senchil Doorley）がコフラン家を訪ねてくる。マギー・メイは50歳ぐらいの娼婦で，黒のミニ・スカにタイツ，白いハイ・ヒール，セクシーなブラウス姿。大きな包みを抱えている。同年輩のセンチルは妻の半分の体格（いわゆる「蚤の夫婦」）で，喫煙や飲酒などに関して，たえず妻の健康状態を気遣っている。奥からスカートにセーター姿のポーシャが出てきて，二人を迎える。名付け親のマギー・メイが持ってきた誕生日プレゼントは，90センチもあるデルフト[3]焼き陶器の馬の置物で，後足で立ち，いまにも駆け出さんばかりの勢いで，ポーシャは気に入る。家族の話題に移り，17歳で結婚したポーシャはすでに3人の息子――12月で12歳の長男ジェイソン（Jason），10歳の次男ピーター

(Peter)，就学した[4]（4歳の）三男クィンティン (Quintin) ——がいる。大学進学希望にもかかわらず，父親の命令で，州で指折りの金持ちのラフィアルと結婚してしまったらしいポーシャ。お茶を淹れに台所に立っていたセンチルが，流しの洗い物を買って出るが，ポーシャは断る。伯母夫婦を残して，ポーシャは散歩だと言って外出する。二人はポーシャがひどく落ち込んでいることに気づく。二人はコフラン家を後にする。

第3場　ベルモント川の土手。30歳ぐらいの浅黒い美男子ダーマス・ハリオン (Damus Halion) がスミレを摘んで束にし，逢瀬に遅れてきたポーシャにキスをして，花を髪に飾る。浮気が亭主にばれたかな，とダーマスがラフィアルを「ピョン太郎」(Hopalong) 呼ばわりするのをポーシャは不興がる。(勤務の休憩時間を抜け出してきたのか) 舟小屋での情事を焦るダーマスに，肉体交渉だけのデートはうんざり，この場所にやって来たのはいつもの習慣で，自分が死んだら幽霊になってここへ来る，と拒む。ダーマスは，彼女の伯母（マギー・メイ）は安淫売で，父親スライは地権者を泥酔させて不正に土地を手に入れ，ポーシャは金に目が眩んで婚約予定の自分を捨てた，と食ってかかるが，ポーシャは無視して立ち去る。ダーマスも怒って退場。

第4場　バー「高い樫薮(ハイ・チャパラル)」。ステイシャ (Stacia Doyle) とポーシャが登場し，カウンター席につく。ポーシャと同い年30歳のステイシャは片目で，<クーリナーニー出身のサイクロップス> (the Cyclops of Coolinarny) と渾名 (208) されている。バーテンのフィンタン (Fintan Goolan) が，カウボーイ・ブーツ，拍車，大きなメダルをつけて現れる。ポーシャの誕生日と聞いてお祝いのキスを唇か脚に，と迫るフィンタンに，彼女は脚にキスを許す。ステイシャは通信販売で英国から購入した豚革の眼帯（青・緑・黄・黒の4色セット）を自慢するが，ポーシャは自分なら眼帯はつけない，と答える。注文の酒を持ってフィンタンが戻り，店の奢りだ，と気安く話しかけるが，ステイシャは追い払う。彼女の話では，（1学年下の同窓の）フィンタンは去年従姉妹を妊娠させておきながら完全否認した危険人物だという。ポーシャは最近，夫ラフィアルは帰宅後，疲れた様子で帳簿仕事，家のドアや床が柩のようにきしみ，息苦しい気分だと訴える。これまで一度も休暇旅行すらしたことがなく，仮にベルモント川を離れたら，たえず心がこの場所に戻って来るだろう，と語るほどこの土地への愛着を示すポーシャ。

ステイシャがトイレに立った隙に，フィンタンが現れ，今晩暇だと誘うと，ポーシャはベルモント川で7時に落ち合い，気障と甘言の男の正体を暴くためにファックする，と大胆に応じ，先に店を出る。二人のやりとりを耳にしたステイシャは怒って出てゆく。フィンタンも退場。

第5場　ゲイブリエルの歌声をポーシャは居間で目を閉じてドアに凭れて聞いている。玄関ベルが2度3度と鳴るが，ポーシャは身じろぎしない。母親のメアリアン (Marianne Scully) が入ってきて，散らかり放題の部屋を片付け始めるが，ポーシャは元に戻す。川遊びをしている子どもたちが溺れたりしなければいいけど，という母親の言葉に，ポーシャは，そうなればゲイブリエルの水死も事故だと説明がつき，気が休まるのだろう，と毒づき，自分が手出ししなければ子どもたちは安全だ，

と答える。夫のラフィアルと結婚したのは父親の命令でも玉の輿目当てでもなく，ゲイブリエルと同じく天使の名前を持つ者ならゲイブリエルのような性質があるのでは，と思ったからだけども，実際にはもちろんそうでなかった。昨夜もゲイブリエルと食事をする夢を見て，週末も一緒にいてくれると承諾する笑みを浮かべてくれた，なのに，あんな形で私を捨てる権利はないはずよ，と抑えきれずに泣き始める。メアリアンはしっかりするように声をかける。

50歳くらいの父親スライ（Sly Scully）と父方の祖母ブレイズ（Blaize Scully）が登場。ブレイズは80歳で，腰痛で車椅子に乗っている。誕生日プレゼントをいろいろ思案したが，欲しい物はないだろうとの結論に達し，手ぶらで来たと言い訳するスライに，金斑の紫色のドレスをやっぱり買っておくべきだったわね，とメアリアン。ブレイズは，天国に入場料が必要で地獄がタダなら，息子スライは地獄行きを選ぶほどケチなのだとこき下ろす。ポーシャはこの両親と祖母を挑発するかのように，酒を手酌で飲む。見かねたメアリアンはお茶を淹れに台所に立つ。

スライは，今日，ポーシャがダーマスと川辺で密会している現場（第3場）を偶然目撃し，奴は人品卑しい男だと注意し，親の面子をつぶしたゲイブリエルも非難する。さらに，20エイカーの沼地と薮にすぎなかった荒蕪地をみずから開拓してベルモント農場を築き上げ，そうして得た土地や金のお陰でラフィアルとの縁談もうまくまとまった[5]のだ，と諭す。ポーシャは，ダーマスとは立ち話をしていただけ，と逃げを打つが，スカリーの家名や道徳を汚すような真似は許さない，と父親は厳しく迫る。ポーシャは反発して家から出て行く。

ブレイズは，嫁メアリアンの家系である，ブラックライオンのジョイス家（the Joyces of Blacklion）は忌まわしい血筋の赤毛のティンカーで，双子のゲイブリエルやポーシャにもその血が流れている，と差別的に侮辱する。メアリアンも負けずに，ブレイズがスカリー家に嫁ぐ前の旧姓マガヴァン家（McGoverns）は近親婚を繰り返し，ブレイズの父親は彼女の兄［弟］（すなわち，母子近親相姦が行われた）という噂だ，とやり返す。嫁と姑はその後も激しく罵りあう。メアリアンは新婦のとき（すでに双子を出産していた？）まだ日の明るい夏の午後6時，嫁といっしょにいたくないブレイズから，暑い寝室に去るように命じられた屈辱の思い出を訴え，義母の世話はもう金輪際しない，と言って立ち去る。なあに，しらっとした顔で夕方には玄関先に戻っているさ，とブレイズは嘯いて，スライとともに退場。

第6場　舞台の片側では，ラフィアルが午後7時に帰宅し，蠟燭をつけ，ワインをあけて妻の誕生日を祝う準備をする。もう片側の川辺に，ポーシャが登場，座って煙草を吹かしながら川面を眺めている。7時の約束を2時間過ぎてはいるが，様子を確かめに来たフィンタンと出合う。ポーシャは逢瀬に来たのではなく，いつもの習慣で来ただけだと断り，鮭の母川回帰本能やベルモントという地名の謂われ——村八分で磔にされた女性を川神ベルが救出した際に川が生まれた——を話して聞かせるが，フィンタンがいっこうに興味を示さず，ポーシャを口説こうとするや，口汚く罵りはじめ，浅瀬を通って家路につく。袖にされたフィンタンも怒って退場。

第7場　真夜中近く。ラフィアルがワインを空け，苛々と部屋を歩き回っている。サンダルを手に裸足のポーシャが帰宅。子どもたちの世話もせずに遅くまで外出していたことを咎めるラフィアルに，結婚当初から子どもをもうける気もなく，自分には我が子を愛することができない，とポーシャ。辛くとも亡きゲイブリエルのことは忘れる潮時だ，と諭すラフィアルに，ゲイブリエルではなく，不眠症の自分にベッドで触ってくる無理解な夫こそが問題で，自分は脚に障害を持つ，のろまな夫を軽蔑しているし，今晩遅くなったのはバーテンと寝ていたからだ，と挑発する。しかし，どんな悲しみもひとたび癒されれば，その瘡蓋(かさぶた)を剝がすものはない，と付け加える。暗転。

第2幕　第1場　（第1幕の翌日もしくは翌々日の）夕方のベルモント川。川を投光器が照らすなか，スリップ姿のポーシャの溺死体が滑車で吊り上げられる。センチルは自分の上着を脱いで遺体に掛けようとするが，高くて届かず，遺体の足先に無様にひっかかる。やがて下ろされた遺体をスライが綱をほどき，ラフィアルが抱きかかえる。彼を先頭に，ポーシャの両親，センチル夫婦，ステイシャは退場。（ゲイブリエルは横を向いて歌いながら佇んでいる。）

残されたダーマスとフィンタンは煙草をくゆらしながら，やはり同一地点で溺死体で発見された双生児ゲイブリエルとポーシャがそっくりだったと回想し，学校のバス旅行の際に二人がそろって行方不明となり，懸命の捜索の結果，ボートに乗って沖合8キロの海上にいるところを救助された事件を物語る。二人は「どこでもいい，ここじゃないところ」へ行こうとしていたのだと，あっけらかんと答えたのだという。そんなポーシャがなぜラフィアルと結婚したのだろうか，という疑問に，相手は誰でもよかったんだろう，と互いに納得して，ダーマスとフィンタンは別れて立ち去る。

第2場　（第1場の翌日，あるいはそれ以降の）ポーシャ家の居間。ポーシャの葬儀当日。

葬儀に参列しなかったらしい（あるいは，早めに切り上げて戻った？）車椅子のブレイズをステイシャが居間へと連れて入る。ブレイズは渋るステイシャに無理にマコーマック[6]のレコードをかけさせ，いっしょに口ずさむ。しかし，やはり葬儀当日に不謹慎と非難されるのを恐れて，しばらくして音楽を止めさせる。親友の死を悼み，両親との不和についてマギー・メイから聞かされた話をステイシャが切り出そうとすると，ブレイズはマギー・メイを激しく非難して彼女の口を封じる。

喪服姿のラフィアルほか，会葬者が帰宅する。ブレイズはラフィアルに向かって，そもそも成り上がり者の彼がポーシャと結婚したのが間違いだった，と食ってかかる。さらに「ブラック・ブッシュ」[7]ウィスキーの酔いもあってか，マギー・メイに対して，ティンカー出身の穢れた血筋のジョイス家の者と縁続きになったせいで，「取り替え子」[8]のような双生児の化け物が生まれた，と嫁メアリアン（マギー・メイの姉妹）を侮辱し，飲み干したウィスキーのグラスを壁に投げつけて，粉砕する。息子スライはメアリアンが示す冷淡な態度に逆上して，なんでも俺のせいにするな，と15年前に死んだゲイブリエルの話を持ち出す。本来なら一人前の農夫に鍛えるべきところを，農繁期にも関わらず，歌の稽古に週2回もダブリンまで長距離（片道110キロ）運転して送迎してやり，ろくすっぽ挨拶も交わ

さない息子を「地獄からの除け者」と思うこともあったが，そのソプラノの美声には聞き惚れていた，と述懐する。今日はポーシャの葬儀なのにポーシャをちっとも悼もうとはしない，とメアリアンは反論し，ブレイズと口論になりかけるので，マギー・メイが車椅子を動かしてブレイズをみんなから引き離す。

他人から聞かれない位置まで来ると彼女は，かつてブレイズの亭主と売春行為をして，ブレイズが卵を売って儲けた50ポンド（1万円相当）を報酬に貰ったこと，亭主はブレイズを毛嫌いし，たえず彼女に家庭内暴力を振るっていたことを知っている，と威嚇する。ラフィアルは子どもたちを心配するが，姉妹の自宅でお世話しているから大丈夫，とステイシャは答える。ゲイブリエルの歌声が響くなか，照明が落ちる。

第3幕　第1場　第1幕（ポーシャ30歳の誕生日）の翌朝。同じ居間。ゲイブリエルの歌声で目覚めたポーシャは煙草を一服する。出勤前のラフィアルが登場し，カーテンを開けようとするのを，彼女は留める。昨夜の暴言の取り消しを条件にラフィアルが和解を申し出て，ポーシャの方も夕食の献立の希望を訊くなど最初は穏やかだったが，末っ子のクィンティンの着替えを依頼されると，ポーシャはまた憤然となる。世間の普通の母親のように愛情をもって育児をすることが自分にはできず，玩具や風呂桶が絶好の虐待道具に見えてくるような危ない自分が近くにいないことがかえって子どもの安全に役立つのだ，こういう打ち明け話ができるのはそんな恐ろしい真似を実際にはしないことの証しでもある，と語る。少し気がかりになったラフィアルは，すこし睡眠をとるように言って，立ち去る。

第2場　ゲイブリエルの歌声に居間から飛び出すポーシャ。ベルモント川のほとりに彼女が息を切らして駆けつけると，歌声は止む。ゲイブリエルに呼びかけるポーシャに，ダーマスが声をかける。亡霊ゲイブリエルの歌声を聞いたという者も他にいるが，それよりも俺と人生を楽しもう，とキスをするダーマスに，セックスなど退屈な営みであり，男と寝るよりもベルモント川岸に座っている方がまし，16年の付き合いも単なる気晴らしにすぎず，もう二度と会うこともない，と絶縁を宣言するポーシャ。3人の子どもの中には俺の子がいるはずとラフィアルに告げると脅迫するダーマスだが，みんなラフィアルの子どもなのは確かだと，ポーシャは怯まない。業を煮やしたダーマスは，自分の方から縁切りだと宣言して，退場する。

第3場　おなじく川辺。立ち去るダーマスを見かけたマギー・メイが，浮気相手としてダーマスは感心しない，と忠言。ラフィアルは自分の父親と同様に蓄財にしか興味がないから，彼との情事はばれていない，とポーシャ。煙草を吹かしながら二人で昔を回想する。かつて墓地の門扉がゲイブリエルの上に倒壊して瀕死の重傷を負う事故以来，彼の調子がすぐれなかったのは，今から思えばなにかの予兆のようで，人生は予め定められた計画通りに進行するのか，それとも成り行き任せで動いているのか，とポーシャは尋ねる。マギー・メイは，他者によって決定済みと考える方が自己譴責せずにす

む，と答える。自分には取り柄がないが，夫センチルは立派だと言って，二人のなりそめを物語る。ロンドンのキングズ・クロスで街娼をしていた頃，やり逃げされて裸足で困っていた自分を，夜警だったセンチルが自宅で介抱してくれ，（ベルモント川20マイルの土地の）同郷人と分かって徹夜で話に花が咲き，翌朝靴をプレゼントしてくれたのにすっかり参ってしまったのだと言う。

ポーシャは，心に狼歯が生えていて自分を孤立させている，みずから手を下さずにここから風にでも連れ去ってほしい心境だ，と前置きして，ゲイブリエルの死の真相を語り始める。二人は入水心中を計画，実行に移したが，土壇場で恐怖にとらわれたポーシャは立ち止まり，引き返すようにゲイブリエルに呼びかけた。しかしその声は波音にかき消され，最後に振り返って驚愕の表情を浮かべ戻ろうとした彼を，引き波がさらっていったのだという。この事実を彼女は両親にも知らせていなかった。双子は自分たちでも相手と自分の区別がつかなくなるほどの一体感を共有し，お互いに相手を自分の名前で呼ぶこともあった。もう一度ゲイブリエルに会えれば元気になれるのに，と願うポーシャだが，それは無理な相談，とマギー・メイ。ふたりはポーシャの子どもたちを迎えに学校に行く。

第4場　午後2時のバー「高い樫薮（ハイ・チャパラル）」。フィンタンがテーブルを拭いているところへ，ステイシャと買い物袋を下げたポーシャが登場。ステイシャはジュークボックスでカントリー・ウェスタン曲をかける。前（々）夜のつれない仕打ち（第1幕第6場）を根に持つフィンタンはポーシャとやり合うが，ポーシャはかまわずステイシャとスウィング・ダンスをして踊る。

店の前に車を見かけたから，とマギー・メイとセンチルも来店。マギー・メイは靴を脱いで踊りに加わる。ポーシャは再びゲイブリエルへの想いにとらわれかけるが，酒を一気飲みして，センチルを誘ってワルツを踊る。その間，マギー・メイとステイシャはポーシャの話をする。構ってもらえないので彼女の子どもたちが暴力的破壊的になっていることをステイシャが心配すると，マギー・メイは次のような暴露話をする。――実は，ポーシャの両親（スライとメアリアン）は腹違いのきょうだい（兄妹または姉弟）であり，スライは嫡男だが，メアリアンはほぼ同じ時期にブレイズの夫が別の女性に孕ませた私生児であり，ある意味では二人は＜双子＞と言ってもよく，この事実をメアリアン自身知らないだろうという。ブレイズはもちろん，実子スライと異母子メアリアンの婚姻に断固反対したが，反対する理由は恥辱から打ち明けられず，黙認する結果となり，近親婚で血が濃すぎたために，ゲイブリエルは出生時から精神異常で，溺死につながったのだろう。このことはポーシャも知らないことであり，ステイシャは夫のジャスティンにも黙っていると約束する。

踊っているポーシャとセンチルに照明があたる。「マイ・ビスケット」をかじりながら優しくポーシャの頭を撫でるセンチルをポーシャは「無垢」と褒めるが，当人はばかな「落伍者」で，自分たち日陰者は生きた証しを人生に残さない，と語る。ステイシャが子どもを迎えに行く時刻だと急かす。ポーシャは50ポンド札[9]（約1万円）を出して釣銭を断るが，マギー・メイはそれを急いで奪って，センチルに5ポンド札（約千円）を出させる。全員，退場。

第5場　ポーシャの自宅居間。ゲイブリエルの幽かな歌声を聞こうとテーブルの上に上がって耳を

澄ますポーシャを見て，訪ねてきた母親メアリアンは，育児や家事に怠慢なのはゲイブリエルの呪縛にかかっているからで，まるで悪鬼(ゴブリン)のようだと罵る。ポーシャはテーブルから猫のように母親の上に跳びかかり，のしかかったまま，激しく母親をなじる。才能あるゲイブリエルと違い，ただの影分身のポーシャなど好きでなかった，とメアリアンが侮辱すると，ゲイブリエルにとって一番大事なのは自分だった，とポーシャも言い返す。ポーシャがゲイブリエルを遠ざけ，会話や食事もともにせず，他の友だちと付き合うようになってからゲイブリエルは歌を歌わなくなった，と母親が指摘すると，ポーシャはそれまで秘密にしていた事実——第3場でマギー・メイに打ち明けたように，きょうだいで心中しようとして，自分だけが躊躇して死にきれなかったこと——を明かす。

ちょうどそのとき，荷物を抱えて遅れてやってきた父親スライはこの台詞を聞きつけて逆上し，二人が素っ裸で踊ったりするなどの破廉恥行為を目撃したことがある，とポーシャを責め立て，出て行く。スライが持ってきた荷物は，メアリアンがポーシャの誕生日プレゼントにと選んでいたドレスで，彼女はそれを渡して出て行く。ポーシャはそのドレスを着てみる。

第6場　ポーシャは蠟燭やワインで食卓を整え，夫から貰ったダイヤのブレスレットをつける。ラフィアルが仕事から戻り，食卓を見て上機嫌になる。ふたりは農民のようにガツガツと，会話もなく，食事を食べ終える。食後，ラフィアルは，バーテンのフィンタンと会ってポーシャとは何の関係もなかったことを突き止め，なぜ嘘をついたのかと，追及する。ポーシャは，覚えている限りでは5歳のころからゲイブリエルと関係を持っていたこと，もっと以前に母親の胎内で絡み合っていたこと，15歳になってダーマスと寝たところをゲイブリエルに目撃されてから彼が自分と口を利かなくなったこと，を白状する。ラフィアルは結婚以来13年間，ゲイブリエルに対してと同じような口調で自分に対して話してくれるのを待ち続けてきたが，もう愛想が尽きた，と宣言する。ポーシャはゲイブリエルを忘れることは自分にはどうしてもできない，と応える。ラフィアルは退場し，ゲイブリエルの歌声が勝ち誇ったように流れる。

(II)　『ポーシャ・コフラン』の主題

(1)　男女の双生児の問題

(a)　ポーシャとゲイブリエルは一卵性双生児か？

梗概で見てきたように，『ポーシャ・コフラン』の重要な設定は，まず，主人公ポーシャとゲイブリエルが双生児である点である。双生児には，一卵性双生児と二卵性双生児があり，とりわけ一卵性双生児がよく似ているのは有名である。一般に思われているほどそっくりではない，という教育現場からの報告がある一方で，信じがたいまでに一致する例も紹介されており，<瓜二つ>と形容されるような，そっくりな似方をするのは一卵性双生児である。『ポーシャ・コフラン』で強調的に言及されるポーシャとゲイブリエルの似方を考えれば，二人は当然，一卵性双生児であろうと想像される。

「瓜二つ。揺りかごのなかであなたたち二人を区別することはできなかった」(211)と母親が赤ん坊のころを述懐し，学校生活を送るようになっても，「クラスの集合写真をいまでも持っているが，いまだにどっちがどっちか区別がつかない」(225)し，「ふたりに質問をすれば同じ答えが返ってくる――同じ時に，同じ抑揚，同じ間合い，なにもかも同じ」(224)，たとえ「ふたりを別室に入れても，やっぱり同じ答え」(225)，と，ダーマスが呆れるほど外見や発話が似ているからである。

しかし，残念なことに，この想定は成り立たない。一卵性双生児は男と女の組み合わせでは生まれない，とされるからである。筆者があたったいくつかの文献では，以下のように，一卵性で異性の双生児の可能性はことごとく否定されている。

・「二卵性双生児には，男男，女女の同性のものの他に，男と女の双生児も生まれます。(中略) 一卵性双生児では男男，女女の同性の双生児しか生まれません。」[10)]
・「一卵性の場合は二人が同じ性別の双生児しかいない。(中略) 体格などが全く似ていないとか，性別が違うとかいう場合は二卵性である。二卵性では二人が同性の場合も異性の場合もある。」[11)]
・「１卵生双生児では男男，女女の同性の双生児のみが生まれる。」[12)]
・(一卵性の)「場合の双生児は同性」[13)]
・(一卵性の)「ふたりの子供はまったく同一で　性別　性格　血液型　体形　体質／ときには心理も同じである」[14)]
・「一卵性双胎は性別と血液型は常に同じです」[15)]
・「１卵生双生児は必ず同性であるが，２卵生双生児は同性であるばあいと異性であるばあいとほぼ同数である」[16)]

たしかに，遺伝子が同一であるなら，性も同一であるのが当然であり，異性の一卵性双生児という概念は自己矛盾している。

しかしながら，双生児の種類分けをした，ある図解では，１つの卵子に２つの精子が同時に進入し，それが二分した場合として＜一卵性二精子双生児？＞（？は原文のママ）を掲げ，その場合には異性の双生児も誕生すると明示しているものがある[17)]。

さらに，より複雑な事例として，可能性は低いものの，単純な一卵性，二卵性以外にも次の３種類が考えられるという[18)]。

① 多胎妊娠：２個の卵子が同一の排卵周期内に別々の２人の男性の精子によって受精するもの
② 過受胎：通常の妊娠が起こり，翌月に本来なら止まるはずの排卵が間違って起

こり，その卵子が受精し，すでに別の胎児が育っている子宮で育ち始めるもの(動物では確認されているが，人間では明確な報告例はない)

③　卵子が，受精前になぜだか分裂しており，そのそれぞれが別々の精子を受精するもの（珍しいが，報告例がある）

この③の事例は，前述の＜一卵性二精子双生児＞に似てはいるが，受精前にすでに卵割している点では，異なるもののようである。

最後に，もうひとつ可能性として考えられるのは，受精卵分裂直後に，一卵性双生児の片方に起こる染色体の異常，すなわち遺伝子の突然変異である。以下，引用すると，

染色体の異常が一卵性双生児の片方にのみ生じた場合，ときとして信じられないような結果を生むこともある。くわしく報告されたある驚くべき症例に，一方が男性もう一方が外見上女性という一卵性双生児がある(中略)。この一卵性双生児は発生の当初はともにXY染色体をもつ男性だったが，片方がY染色体を欠損し，その結果XOになったものだ。こういう染色体異常はターナー症候群として知られているが，女性的な体をもち女性的な諸特徴を示すのである[19]。

アメリカの内科医ターナー（Henry H. Turner, 1892-1970）の1938年の研究にちなむ「ターナー症候群」(Turner's Syndrome) は，性染色体異常による女子の性腺発育障害で，低い身長，外反射，二次性徴欠如などを特徴としている。しかしながらポーシャは，テキストを読む限りでは，「外見上女性」でなければ，単に「女性的」体躯や特徴を示すのではなく，３児の出産が端的に示すように，あきらかに「女性」そのものである。むしろゲイブリエルのほうが，「女の子のように見え」「歌声も女の子だった」(224) と，15歳の時まで「女性的」であった指摘が周囲の人々からなされている。したがって，＜女性化した男性＞と＜男性＞の組み合わせであるとされる，上記のターナー症候群とは逆の例になってしまう。

さりとて，自然界の摩訶不思議で，テキストのような異性の一卵性双生児がまったく絶無であるとは断言できないだろう。こうしたこだわりを捨てて，二人は二卵性双生児で，かつ非常によく似ていた，という想定でも構わないのだろうが，戯曲のなかのポーシャとゲイブリエルの酷似を考えると，当然，この二人は一卵性双生児であることが期待される。

本論冒頭に記したように，どのような経緯かは知らないが，この戯曲はダブリン産科病院からの執筆委嘱を受けて書かれている。なんらかの稀有な症例情報をマリー

ナ・カーが産科病院から事前に得ていたとか，あるいは草稿執筆段階で病院側から肯定的なコメントを貰っていた可能性もある。この医科学的信憑性については引き続き，調査課題としたい。

以上，長々とこだわってきたのには理由がある。<男女の一卵性双生児>という設定は，科学的事実に反するか，きわめて稀有な事例である。つまり，この設定を容認することは作品の虚構性，あるいは幻想性・超自然性を最初から容認することを観客・読者に要求することになることを指摘しておきたい。

(b) 双生児に関する基礎知識

テレビや映画に登場する有名人を別にすれば，筆者はこれまで，双生児と呼ばれる人たちをこの目で見たことはない。実際の体験や知識の欠如のために，作品理解に困難を感じたことは事実である。そこで，付け焼刃的に調べたものにすぎないが，テキストと関係しそうな参考事項を以下に記しておきたい。

双生児出産率[20]は，一卵性双生児は世界中でほぼ一定頻度(1,000出産あたり4前後)とされるが，二卵生双生児は遺伝や環境が多排卵に関係するために人種差が見られるという。アフリカの黒人，とくにナイジェリア人では1,000出産あたり40.0，続いてアメリカ黒人の11.0，白人系の欧米人で6～10程度である。マリーナ・カーのアイルランド人の統計値は（別の資料[21]によれば）11.6と欧米のなかでも比較的高い部類に属し，ちなみにイギリス人の値は8.9である。これらは日本人の比率2.3，中国人の比率2.2と比較すると約4倍であり，欧米では双生児は日本ほど珍しくないことが分かる。

また，母親の年齢が高くなるほど，また経産婦であるほど双生児出産率は高まり，30代後半がピークとされる。戯曲の設定ではポーシャとゲイブリエルを初産で産んだメアリアンの出産年齢は20歳ごろであり，この傾向とは必ずしも合致しない。

双生児に「長幼の序」をつけて扱う習慣や傾向は，アメリカ，イギリス，オーストラリアなどの英語圏諸国ではまったくない，という調査がある[22]。これは'brother', 'sister'の用法に見られるように，言語にも反映されている。(あるいは言語が発想を規定していると言うべきか。)テキストにおいても，どちらが先に生まれたのかについては判断材料がない。

最後に，出産時の双生児の様子について，(わたしたち二人は)「手をつないで子宮から出てきたのよ」(ポーシャ，211)，(ゲイブリエルが)「お前[＝ポーシャ]の脚をつかんで子宮から出てきたわ」(マリアンヌ，247）という分娩状況を描写する台詞は，どちらが正しいのだろうか。どちらも単なる誇張表現だろうか，それとも旧約聖書の双生児ヤコブの名が，ヘブル語で「踵を握る者」にちなむ連想だろうか。

二人の胎児が子宮内でとる位置関係については，「双胎の胎位は，両方とも頭位が45％ともっとも多く，ついで一方が頭位でもう一方が骨盤位であるのが38％，ついで両方とも骨盤位が９％です。（中略）双方の胎児がひっかかって出産できない場合があり，これを懸鉤（けんこう）といいます。このような場合は帝王切開の適応となります。」[23]手足を屈曲させ，互いに密着している胎児たちは，どのような位置関係にあっても，「手をつなぎ」「脚をつかむ」ことは物理的には可能だろうが，果たして現実にそのような接触をして産まれる事例はあるのだろうか。これらも今後の調査課題である。

(2) 双生児にとっての対象喪失

一卵性か二卵性かの詮索はさておき，次に問題となるのが，双生児の一方が亡くなることがもう一方に及ぼす苦悩や葛藤がどのようなものであるか，である。双生児はきわめて緊密な一体感を相互に抱き，一方の死は他方に深い影響を及ぼすことは容易に推測できる。

「神様が魂を手渡して下さるとき，きっと私の魂とゲイブリエルの魂を混ぜ合わせてしまったのに違いないわ――それか，あるいは，私たちにたったひとつだけ魂を下さり，その魂は彼とともにベルモント川に消えたのよ」(211)

肉体は二つだが生命（魂）は一つで，一方が死ねば他方も生きてはいけない運命にある――ポーシャはそう訴えている。

「双子であることがどんなことか，分かっている人がいるのかしら。なにもかも置き換わってごっちゃになって，ひとりが二人の人間だったり，どちらでもなかったりする。彼は私をゲイブリエル，私は彼をポーシャって，よく呼んでいたわ。ときどき，訳が分からなくなって，どっちがどっちか区別できず，他の誰かに識別してもらって，もとの二人に戻して貰わないといけなかった。ポーシャって呼ぶだけで彼を泣かせることもできたわ。」(241)

イルズ＝マーグレット・ボーゲル（Ilse＝Margret Vogel, 1914-）の児童文学作品『ふたりのひみつ』（*My Twin Sister Erika*, 1976）を分析して，双子の片方が亡くなった場合の他方への精神的影響について，自らも双生児である小島潤子は，「強烈な同一視・運命共同体感覚」をもつ双子の一方の死は，「自らも抹消されたような感覚」を引き起こし，さらには身体の同じ部位に苦痛を共感覚するなど，本当は自分が死ん

だのではないか，と錯覚するほどに「自我境界の曖昧さ」が生じ，さらには，一方を死に追いやったのは自分の責任ではないかという「強烈な不安や罪悪感」に苛まされるのだと述べている[24]。

ゲイブリエルの死は，ポーシャの告白から明らかなように，「自分の責任ではないか」というレベルを超えて，厳然たる事実としてポーシャ自身の過失である。彼女は心中に同意しながら，土壇場で恐怖にとらわれ，ゲイブリエルを見捨てたからである。

ゲイブリエルの死後，その亡霊はたえず彼女につきまとい，苦しめる。そのさまは，まるでドッペルゲンガー（Doppelgänger）を思わせる。スコットランドでは＜共歩き＞（co-walker），イングランドでは「フェチ」（fetch）とも呼ばれる，この「生霊」は，ゲール語学者ロバート・カーク（Robert Kirk, 1641?-92）の古典『秘密の共和国』（*The Secret Commonwealth of Elves, Fauns, and Fairies*, 1691）では，「まるで双子のように，伴侶のように，影のようにつきまとい」，「ある人物がまもなく死ぬという時期に現れる」[25]のだという。メアリアンも，ポーシャがゲイブリエルの「影にすぎなかった」（249）と表現していることが想起される。

テキストではゲイブリエルには台詞は与えられていない。全15場のうち，8場で舞台に登場，もしくは歌声が流れるものの，決して彼は言葉を発さない。このことが，ポーシャの苦悩をいっそう増幅させる。『猫ヶ沼のほとりで』に登場するジョウゼフの亡霊は，自分を殺した姉ヘスターに話しかけ，やりとりを通して互いの疑問やわだかまりはそれなりの決着を見る。しかし，ゲイブリエルは沈黙を貫き，「美しく，たぐいまれな」「神様の高音」（230）で歌い続け，さながらライン川の妖女ローレライ（Lorelei）の歌声のように，ポーシャを黄泉の国へと誘うばかりである。

「私を放っておくか，目の前に姿を見せるか，できないの？天国は結局，それほど素敵なところではないの？　天国の街路は，縞大理石や黄金で舗装されてはいないの？天使たちは，楽園の永久の大通り沿いに腰をおろして，コーヒーを飲んだり羽を整えたりしてはいないの？（泣きそうになって）私がいなくて淋しい？」（235）――ポーシャの必死の呼びかけにゲイブリエルは応えない。怒りや呪いの言葉よりも沈黙はポーシャに突き刺さる。

＜ゲイブリエル＞の名は，もちろん大天使ガブリエル（「神の英雄」の意）にちなむものであるが，ガブリエルの主な仕事は，マリアへの処女懐胎告知に見られるように「神の意志を伝えるメッセンジャー，そして天国の町の広報係という役割」[26]である。なにかを伝えるべき役目の天使が，なにも伝えようとしないことがポーシャの焦燥を募らせる。それでも彼の姿はけっしてこの世から消えない。ポーシャは次のように訴える。

ポーシャ　ゲイブリエルのことは忘れろ，ですって！　彼はどこにでもいるのよ，父さん。どこにでも。父さんの四方山(よもやま)の土地 (fortry fields) のどんな片隅だって，ゲイブリエルを思い出させないところはないわ。彼の名前は，ベルモント丘を舞い降りる椋鳥(ムクドリ)の嘴や，霜降る冬の夜に納屋から彼を呼んで鳴く牝牛の口のなかにある。この川そのものが，かつて彼がこの世にいて，いまはもういない，ってことを教えてくれる。(213-214)

自然の風物や鳥や家畜の鳴き声が，亡きゲイブリエルを連想させるだけでなく，芝居全体を通して，ポーシャは彼の歌声を耳にする。これは，通常の理解では，<幻聴>と解釈される症状であり，「ときどき，あの子は大丈夫なのかしら，と本当に思うわ」(215)と母親メアリアンも，情緒不安な娘への懸念を口にするし，テーブルから跳びかかられたときには「お前の頭は正気じゃない！」(248) と叫んでいる。ゲイブリエルが精神疾患を有していたというマギー・メイの台詞 (245) を信じるならば，双生児のポーシャにも同じような兆候が現れても遺伝的に不思議ではないだろう。ある研究によれば，分裂病に罹患する一致率は，一卵性双生児の場合(58%)，二卵性の場合(0%) よりもはるかに高いとする報告もあるし，二人とも自殺した双生児に関する記述の中で「この二人には（中略）狂気に至りやすいなんらかの遺伝的共通性が存在したと考えられる」と，アメリカ精神科学の父ベンジャミン・ラッシュが述べている，という[27]。

育児・家事はもちろん，生活全般に気力が湧かず，酒と煙草に浸り，ひどく落ち込んでいるかと思えば突如として激昂したり，嗚咽したりするポーシャの不安定な精神は，もちろん尋常ではない。しかし，こうした誰の目にも明らかな，感情の激しい起伏のほかにも，ポーシャの微妙な精神錯乱を察知させる伏線がいくつかある。

例えば，第1幕第7場の夫婦喧嘩の場面で，彼女は夫に向かって「特注のカウボーイ・ブーツを履いて，あんたが私のまわりをよたよた歩いている姿を見るのは我慢ならないのよ！」(221) と叫ぶ。片脚が不自由で，義足を装着しているかも知れないラフィアルが<特注のカウボーイ・ブーツ>のような大型靴をつけている可能性はあるものの，テキストのト書にはラフィアルの靴や服装の指定はなく，むしろ<カウボーイ・ブーツ>と明示されている (204) のは，バーテンのフィンタンの方である。ここでは，彼女が直前に会ったフィンタンとの混同が無意識のうちに起こり，フィンタンへの嫌悪が<カウボーイ・ブーツ>など履いてはいない夫に向けられた，と解釈できないだろうか。

あるいは，鮭の母川回帰本能に言及するくだりも不可解である。「よおく耳を傾けれ

ば，聞こえるわ，鮭が川を上っていき，必死になってシャノン川をめざし，海の出入り口へ入り，そこからインド洋の産卵場へとゆっくりと里帰りの旅をするのが」，「以前にそんな旅をしたことは一度もないけれど，辿っていく道筋を生まれながらに知っているのよ」(218-219) とポーシャは縷々，説明するのだが，川を上っていった鮭はそこで産卵して死に絶え，孵化した稚魚が川を出て大海へ入り，4年間ほど数万キロに渡って索餌回遊したのち，ふたたび産卵場であり，かつ自分の生まれ故郷である川を目指すのが，鮭の習性[28]ではないのだろうか。筆者の誤読・誤解かも知れないが，少なくともインド洋は鮭の産卵場ではないはずである。『ザ・マイ』のなかでマイが娘に，針と糸を買いに肉屋に行くように命じるのにも似て，なにか腑に落ちないもの，精神の崩壊の前兆めいたものを筆者は感じる。

(3) 双生児同士の情交

さらにこの作品で衝撃的なのは，ポーシャとゲイブリエルが双生児の親密さの限度を越えて，情交に至ったとする告白である。少し長いが引用しよう。

ポーシャ (中略)誰にもこのことは話したことはないけれど——いいこと，私とゲイブリエルは，ベルモント川辺の草叢の中でずっと前から愛し合ってきたの，5歳の時から——それより先はとにかく思い出せないけど——でも，私たちは生まれる前からそうしてきたと思う。ときどき，目を閉じると，身の回りに水が押し寄せるのを感じ，上の方で母さんの心臓の鼓動が聞こえ，私たちはもつれ合い，彼の足は私の頭の上，私の足は彼の腕の上にあって，どちらが相手なのか分からないし，分かりたくもない，水が二人の耳のまわりに膨れ上がって，世界はただ，ポーシャとゲイブリエルが，窮屈で熱い子宮のなかに永遠に詰め込まれていて，そこでは呼吸もなく，思考もなく，視界もなく，ただ暗闇と心音と接触があるだけ——そして15歳の時，私はダーマス・ハリオンと寝たわ——分別を持つべきだったわ，どうでもいい人だったのだから——それをゲイブリエルは見て，それから私に話しかけなくなった。(253-254)

引用中の「愛し合ってきた」の原文は'made love'である。5歳という年齢を考えると，これは必ずしも性行為の遂行を含意してはいないかもしれない。しかし，母親からは「馬鹿げたいちゃつき」(stupid carry-on [248])，父親からは「裸踊り」(dancin' in yeer pelts [251]) の「変態行為」(perverted activities [251]) となじられているからには，お医者さんごっこめいた，全裸でのペッティング，乳繰り合いではあったのだろう。のちに思春期を迎えて二人の肉体関係がどこまで進んだのかは分からない

し，ゲイブリエルとそうした濃密な関係にあったポーシャがいったい何故，別の男性と寝たのかも明らかでない。ポーシャの台詞からは，たんに魔がさしたとしか言いようがない，成り行きまかせの行為であった後悔が感じられるだけである。

すでにポーシャの両親が実は異母きょうだいの近親相姦であり，噂では祖母ブレイズもまた近親相姦の子と目されているように，一族は禁忌とされる近親婚を繰り返しており，遺伝の呪縛めいた因縁が感じられる。しかし，二人が仮に，類い希な＜男女の一卵性双生児＞であるならば，その性交渉は生物学的にも倫理的にも想像を絶する意味合いを持たざるを得ない。それは，自分と同一の存在との合体・融合であり，究極的な自己愛である。

ゲイブリエルの歌声は崇高な天上の音楽であると同時に，性愛の絶頂感を象徴する音楽として，オーガズムを表しているとも解釈できる。三島由紀夫（1925-70）の中篇『音楽』（初出『婦人公論』1964年）は，少女期に兄と近親相姦をした菱川麗子が，その後不感症となり「音楽が聞こえない」と訴えて，精神科医を訪れる作品である。ゲイブリエルの歌声は，ふたりの甘美な蜜月の記憶をポーシャに想起させるものであり，ポーシャが彼に冷淡な態度を示し始めたころ，彼がとつぜん歌うのを止めた（250）ことと符合するだろう。

（余談ながら，おそらくゲイブリエルの歌声は録音済みのテープを大部分使うのだろうが，かなりの演技力を要求される役回りである。マリーナ・カーの別の作品『ザ・マイ』では，マイの娘がナレーターとして舞台の隅から進行を見つめるという類似した手法を取っているが，ゲイブリエル役には，その存在だけで異界からの使者と思わせるような，線の細く影の薄い，美少年タイプの役者を起用する必要があるだろう。）

ゲイブリエルの死の2年後，17歳のポーシャがラフィアルとの結婚に踏み切ったのは，彼女が繰り返すように（210/255），ゲイブリエルと同じように天使の名前であったからである。「神は癒す」という意味を持つ＜ラファエル＞は，「伝統的に，人を癒すこと，（中略）若者を保護することをその役割としている」[29]のである。双生児の死に傷ついたポーシャの心を癒す存在として彼の名前は象徴的に響くのだが，皮肉なことには，ポーシャは結婚生活で彼に癒されるどころか，彼の心を踏みにじる言動を行った挙句，その傷は「いつか癒える」（222）と立場をわきまえぬご託宣を夫に与えている。

ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-74）の『失楽園』（*Paradise Lost,* 1667, 74）では，天使ラファエルはエデンの園でアダムとイヴと夕食をともにする。「食事の間，ラファエルは天使はすべて男性の姿をしているのに，どうやってセックスするのかを説明しなければならなくなり，恥ずかしさで顔を真っ赤にしたという。ラファエルは

アダムに，体を形づくっている優れた物質のせいで天使は男にも女にも，時としてはその両方にもなれるのだと説明する。天使にとってのセックスは，彼らの精神体の問題である。この「天使のセックス」は決してエロティックなものではなく，精神的なつながりあるいは二つの愛を結び付けるという行為である」[30]という。

先に引用したポーシャの告白のなかで語られているように，ポーシャとゲイブリエルが肉体的にも精神的にももっとも深く絡み合っていた場所は，熱い羊水に浸された母親の胎内であったことは象徴的である。ポーシャの子宮回帰願望は，生命体の原初の水辺への回帰願望でもある。『猫ヶ沼のほとりで』のヘスターが沼地に固執し，『ザ・マイ』のマイが梟ヶ湖に定住したように，豊かな水流のベルモント川に彼女がつねに執着し，決してそこから離れようとしない姿勢は，以下の台詞でも語られる。

ポーシャ　ええ，そりゃ私だって，ほかの人たちが休暇って呼ぶものを切り抜けられるでしょうけど，私の心はベルモント川に舞い戻ってくるわ。川の流れは荒れているだろうか，穏やかだろうか，川岸はぬかるんでいるだろうか，乾いているだろうか，鮭は海めざして進んでいるだろうか，蛙は睡蓮に産卵しているだろうか，鷺はもう還ってきたかしら，そんなことすべてや，川が私に打ち寄せてくる千千（ちぢ）の物思いを抱くことでしょう。(207-208)

『猫ヶ沼のほとりで』のヘスターが母親ジョウジーからろくに養育されなかったように，ポーシャは我が子を愛せない女性ではあるけれど，ぬくもりと密着感のある母の胎内にいた懐かしい記憶は，彼女に安息と信頼をもたらしてくれる。鮭が生まれ故郷の河川を本能的に覚えているように，渡り鳥が毎年同じ土地へ飛来するように，ポーシャの心は羊水を思わせるベルモント川に絶えず立ち戻り，最後にはそこに身を委ねるのである。

(4)　双生児の文化史

旧約聖書の創世記に登場する兄エサウ（Esau;「毛深い者」または「赤い」の意）と弟ヤコブ（Jacob;「踵をつかむ者」の意）は二卵性双生児であった。ギリシャ神話のカストルとポリュデウケス（Castor and Pollux）は，白鳥に変身したゼウスとレダの間に生まれた双生児であり，アルゴ遠征で嵐から隊を救った功績を称えてゼウスは彼らを，明けの明星と宵の明星の双子座（Gemini; the Twins）に変えたとされる。ローマ建国神話で有名なロムルスとレムスの双生児は，軍神マルスと神殿の乙女との間の子どもである。

中世ヨーロッパでは，<双生児は別々な男性を父にもって生まれる>という偏見から，母親の不貞行為を暗示すると信じられていた。ウェールズでは双生児は将来の繁栄の前兆，イングランドやスコットランドでは逆に不毛の象徴とされ，聖ムンゴの井戸の水をグラスに一杯飲めば双生児，半分だけなら通常の出産をするという言い伝えがあるという。ケルトの星の車輪（天の川）の女神であるアリアンロードの子宮から同時に生まれたのは，闇の神ディランと光の神リュー（ルー）である。このように，「すべての神話には，太母から生まれた光と闇の双子の話を見出すことができる」[31]。ギリシャ・ローマ悲劇をはじめとする古典伝承に造詣の深いマリーナ・カーが，こうした背景知識をもとにして双生児の物語を構築したことは十分に考えられるであろう。

このほかにも近代の文学作品では，マザー・グースやルイス・キャロル（Lewis Carroll, 1832-98）の『鏡の国のアリス』（*Through the Looking-Glass,* 1871）のトゥイードルダムとトゥイードルディー（Tweedledum and Tweedledee）は一卵性双生児であり，ジョルジュ・サンド（George Sand, 1804-76）の『愛の妖精』（*La Petite Fadette*, 1847）では主人公ファデットと双生児兄弟シルヴィネ，ランドリーの恋愛を描いている。アレキサンドル・デュマ（Alexandre Dumas pere, 1802-70）の『鉄仮面』（『ブラジュロンヌ子爵』の後半部，1848年），ソーントン・ワイルダー（Thornton Wilder, 1897-1975）の『サン・ルイス・レイの橋』（*The Bridge of San Luis Rey,* 1927），マーガレット・ミッチェル（Margaret Mitchell, 1900-49）の『風とともに去りぬ』（*Gone with the Wind,* 1936）などでも，双生児がプロット展開上の重要な役割を演じている。オールダス・ハクスリー（Aldous Huxley, 1894-1963）の『素晴らしい新世界』（*Brave New World,* 1932）では，培養装置を用いるポカノフスキー法で人工的に96人も一卵性双生児を作り出す着想が描かれている。マーク・トウェイン（Mark Twain, 1835-1910）には，『かの異形（いぎょう）の双生児』（*Those Extraordinary Twins,* 1894）があるが，この24歳のイタリア人伯爵の双生児（アンジェロとルイジ）はいわゆるシャムの双生児で，下半身は一人である。ドイツの詩人・作家のエーリヒ・ケストナー（Erich Kästner, 1899-1974）の『ふたりのロッテ』（*Das doppelte Lottchen,* 1949）は，双生児ロッテ・ケルナーとルイーゼ・パルフィーが，離婚した両親のもとへ，立場を交換して出かけてゆく話だが，最後にはふたりが自分たちでも見分けがつかなくなる。

また，ケン・ロウチ（Ken Loach, 1936-）監督作品映画『やさしくキスをして』（*Ae Fond Kiss...,* 2004）では，パキスタン移民のカーン（Khan）一家の父親タリク（Tariq）は，1947年のインド・パキスタン紛争のさなかに8歳の双子の弟を誘拐され，以後消息不明になる。タリクの一人息子のカシム（Casim）の名前はこの弟に因むものである

ことが語られ，亡き双子の弟の存在がいかに重いものであったかを示している。ケン・ロウチ監督はインタヴューに答えて「息子につけられた名前は，家族から彼へのとてつもなく大きな期待をあらわす」[32]と述べている。

寡聞にして，アイルランド文学で双生児が登場人物となる作品は思い浮かばない。調べればあるには違いないのだろうが，案外，マリーナ・カーのこの戯曲が代表例の一つになるほど少ないかもしれない。

(5) 近親相姦・近親婚の問題

この作品の暗い底流を流れているのは，現代社会ではタブーとされる近親相姦・近親婚の問題である。「家族の骸骨」(family skelton) とか「押入れ（食器棚）の骸骨」(a skelton in the closet [cupboard]) という英語慣用句で知られる，<外聞を憚られる一家の秘密>が，第3幕に入って次々に暴露されていくことは，梗概で示した通りである。

兄と母の近親相姦の娘という風評のブレイズは，(マギー・メイの話を信じるならば) 実の長男スライと非嫡子の娘メアリアンとの近親相姦を黙認し，孫にあたる双生児ポーシャとゲイブリエルもまた，同じ関係を幼児期から結んでいる。マギー・メイがブレイズの夫と売春をしたのは，義理の娘と義理の父親の近親相姦にあたる行為である。つまり，3世代にわたって，近親相姦が繰り返されている。ポーシャが3人の息子たちを遠ざけるのは，彼女の説明では衝動的な児童虐待を回避するためだというが，もしかすると，心の奥底で，息子たちとの近親相姦を無意識のうちに抑圧する精神的機序が働いているためとは想像できないだろうか。

娼婦稼業のマギー・メイとその<主夫>あるいは<紐>のような立場のセンチル，片脚を切断した夫ラフィアル，片目の友人ステイシャ，肢体不自由なブレイズ，人妻ポーシャと逢瀬を重ねるダーマス，それを知ってのことか，自分もおこぼれに預かろうと彼女を誘惑するフィンタン，情緒不安で暴力傾向のみえる末っ子クインティン…。登場人物はいずれもなんらかの肉体的精神的な障害や道徳的逸脱を負っている。テキストでは語られていない，幾多の謎——なぜ，マギー・メイは娼婦になったのか，なぜステイシャは失明したのか，ラフィアルの事故は労働災害なのか，それとも賠償金目当ての故意なのか——に関しても，驚くような秘密が筐底（きょうてい）に隠されているのかも知れない。

婚外性交渉に関するポーシャの大胆な発言も考慮に値する。ゲイブリエルとの呪縛を断つかのように15歳のとき級友ダーマスと寝た彼女は，17歳でラフィアルと結婚直後に年子で2子をもうけ，6年後に第3子を産んでいる。その間もダーマスとの不倫

は船小屋で続いていたわけだが，ポーシャによれば「いままでいつだって，セックスは大幻滅（a great let-down）だったし，しゃぶったり，汗をかいたり，互いにモノをはめあったりするのは，もう私には意味のないこと」(236) であると，あからさまな嫌悪感を表明している。結婚当初から片脚が不自由な夫との性交渉に不充足感を抱いていたことも推測されるし，「誘惑めいたもの」(anythin' approachin' a come on [203]) を自分から与えておきながら，「くんずほぐれつして汗をかく」(thrashin' and sweatin' [202]) 営みを続けた不倫相手のダーマスを，「気晴らし以上のものではなかった」(never more nor a distraction [237]) とばっさり切り捨てるのも，たとえ肉体的愉悦は得ていたとしても精神的満足には到達していなかったことを示す，彼女の本音の述懐なのかも知れない。

近親婚の問題と関わるのは，血筋・家名の問題である。『猫ヶ沼のほとりで』のキルブライド夫人の言動に見たように，定住生活を送らずにキャラヴァンで移動する＜ティンカー＞への敵意・嫌悪はアイルランド社会にいまでも根強く残っている。ブレイズは嫁メアリアンがティンカーの家系であるジョイス（Joyce）家の者だとして，偏見を露わにする。

ブレイズ　いいや，そうだとも！　あんたたちはこの界隈に，燃えるような赤毛とデカ尻以外にはなんの取り柄もなく，３世代前にやってきた。なのに，州議会は私らが苦労して稼いだ金からあんたたちに家を建ててやっている。あんたたちはどこの馬の骨だか，血統も分からん。(中略) あのジョイスの血の中には悪魔がいて，ゲイブリエルの体内にも，ポーシャの体内にもそいつがいる。神様，私らを，黒い血と黒い魂をした黒目のジプシー一族からお守りください！ (215)

ブレイズは，自分の実家であるマガヴァン (McGovern) 家の血統に，ジョイス家の「穢れた」血が混じることに我慢がならないらしい。たしかに，「マガヴァン」は，「夏」を意味するアイルランド語samhradhに由来する，非常に古いゲールの姓[33]であり，旧ブレフニー（Breffny）地方（現在のキャヴァン州と西リートリム州）を中心に勢力を持つ家名である[34]。しかしながら，彼女が唾棄する「ジョイス」の方も，「喜び」を表すフランス語 Joieに由来する姓で，12世紀にノルマン人移民がもたらしたとされる。コナハト地方の高貴な女性との婚姻が進み，コネマラ地方には「ジョイス・カントリー」と呼ばれる地域もある。ジョイス一族は総じて背が高く，豪商や聖職者，市長，学者，作家を生み出している[35]。すなわち，ブレイズの非難は，「ジョイス」という特定の家名に対して向けられているとすれば，客観的事実として的はずれであり，彼女

の嫌悪はティンカーという生活様式や生業，そして赤毛や黒目といった身体的特徴に向けられていることが分かる。（ちなみに，ブレイズが嫁いだ「スカリー」なる家名は「学生」を意味し，ウェストミース州の氏族名だが，アングロ・ノルマンの圧力でマンスター地方へ移住したとされる[36]。）

すでに見たように，ブレイズのメアリアンへの嫌悪は，本当は家名云々というよりも，この嫁が夫の不義の子である事実によるところが大きい。嫁と姑のこじれた関係以前に，ブレイズには，夫がよそで拵えた子どもであり，その子が実子と婚姻関係を結ぶのを，体面を気遣うあまり告白できず，結果として止められなかったという，自責を伴う鬱屈した感情が横たわっており，そのことがいっそうメアリアンへの辛辣な態度に噴出するのである。よそ者への排他意識もあるだろうが，「3世代前」と言えば，およそ百年前である。ブレイズがやはり忌み嫌うラフィアルはたしかに新参者で成り上がりかも知れないが，ジョイス家の人々はベルモント地区にすでに十分に根を下していると見なすのが常識だろうと思われる。社会的弱者とされるティンカーにかこつけてメアリアンを苛めるブレイズの傲慢の裏には，近親婚を重ねたと噂され，暴力亭主にいたぶられてきた彼女自身の劣等感が透けて見えるようである。ティンカー嫌いのキルブライド夫人にティンカー同然の先祖がいたように，ブレイズの家系にティンカーがいないという保証はどこにもないのである。

(6) シェイクスピアへの参照

戯曲の直接の主題ではないが，興味深いテーマは，この作品に見え隠れするシェイクスピアへの参照である。主人公ポーシャと地名ベルモントは，誰しも『ヴェニスの商人』（*The Merchant of Venice,* 1596）を想起するはずである。『ヴェニスの商人』のポーシャが法律家に男装する設定は，ポーシャが双生児ゲイブリエルとの一体感を強く抱き，男女の性別の境界を越境するモチーフと通じるものがあるだろう。

ポーシャの父親スライ・スカリーは，たんに「狡猾」の語義のみならず，（first name, surnameの相違はあるが）『じゃじゃ馬馴らし』（*Taming of the Shrew,* 出版1623）の導入部に登場するクリストファー・スライ（Christopher Sly）を響かせる。しかも，このクリストファーがティンカー（鋳掛け屋）である点は示唆的である。ティンカーを忌み嫌うブレイズが，その一人息子にティンカーを連想させる名前を偶然にも付けている皮肉が生まれるからである。

双生児の主題自体が，シェイクスピアと密接に関連する。なによりもシェイクスピアは双生児の父親であった。1585年，21歳の時，長男ハムネットと次女ジューディスの双生児が誕生している。男児ハムネットが11歳の幼さで亡くなることも，『ポーシ

ャ・コフラン』のゲイブリエルの夭折と奇妙な暗合を感じさせる。

伝記事実はさておき，シェイクスピアには双生児兄弟(「エフェサスのアンティフォラス」と「シラキュースのアンティフォラス」）と双生児下僕（「エフェサスのドローミオ」と「シラキュースのドローミオ」）２組の双生児の取り違え騒動を描いた『間違いの喜劇』（*Comedy of Errors,* 1592）と『十二夜』（*Twelfth Night,* 1601）があり，両作品では双生児が効果的に生かされている。

前者はローマの喜劇作家プラウトゥス（Titus Maccius Plautus, ca.254-184 B.C.）の『メナエクムス兄弟』を材源とし，「アイデンティティの崩壊の危機に面した人間の苦難や，自己の鏡像が無限に増幅する不気味さ」[37]（安達まみ・執筆）を呈し，後者では双生児を男女異性に設定し，兄セバスチャンの姿に妹ヴァイオラが男装し，別の女性に惚れられてしまう複雑な三角関係を描いている。『間違いの喜劇』は18世紀になっても『双子』（*The Twins*）の標題で，トマス・ハル作（1762年）と思われる改作やウィリアム・ウッヅ作の改作（1780年頃）を生むなど，人々の人気を呼ぶ設定であった[38]。取り違えを題材には選ばなかったものの，マリーナ・カーが，シェイクスピアの双生児戯曲２作品を念頭に置いていたことは十分に考えられるだろう。

(7) 戯曲構成の問題

梗概で示したように，ポーシャ30歳の誕生日当日を描く第１幕のあと，翌日の１日を描くのが第３幕，その後ポーシャの遺体が発見され葬儀が行われるのが第２幕。時間の自然な流れからすると，第２幕と第３幕が相前後した形で舞台は進行する。テキスト未読の観客・読者にとっては，主人公が第２幕冒頭で死んでしまい，この先どうなるのかと訝っていると，第３幕ではその主人公が生き返って，また平然と登場する展開になる。第３幕はフラッシュバック[39]であり，セリフや衣装から第１幕の翌日ということはもちろん推測できるが，映画やテレビ・ドラマのようには字幕の出せない演劇では，なかなか呑みこみにくい入れ替えに違いない。事実，幕間の休憩をとらなかった上演の場合，構成が観客に明確には分かりにくかったとする指摘もある[40]。

言うまでもなく，入れ替えをおこなったのには必然的な理由があるに違いない。マリーナ・カーは，なぜポーシャが自死を選ばざるをえなかったのか，その種明かしを，後置された第３幕において，説得力をもたせて効果的に行いたかったのだろう，と推察される。俊英な文藝評論家フィンタン・オトゥールは，観客が期待するだろう，主人公の脱出の幻想や希望を途中で断ち切り，「一種の心理的検屍」(a kind of psychic autopsy)[41]，すなわち，ポーシャの心の柔細胞を冷静に穿鑿し，彼女の死の原因を突き止めさせるために用意された構成である旨，指摘している。ただ，筆者には，時間

軸に沿って第3幕，第2幕の順に演じたとしても，劇的効果が極端に薄れるとは思われない。むしろギリシャ演劇の伝統に則った自然な時間の推移の方が理解されやすいだろう。『刑事コロンボ』のように，予め種明かしを示しておいて，その解決の推移を見守るという技法は，この陰鬱な芝居には不向きの気がしてならない。

(8) 言語の問題

卑語の多用はこの作品の特徴の一つである。閉店時刻のパブの店先以上[42]に卑語が発せられている，とは初演時の劇評の一節である。筆者の数え落しがなければ，この作品にはfuckがらみの単語が合計23回発せられている。舞台上で最初に発せられる台詞は，ラフィアルの'Ah for fuck's sake.' (193) であり，芝居の終末近くでも彼は3回F-wordを口にする。(そのほかにも，性器を意味するbollix, cuntが各2回，bloodyが1回出てくる。)戦争映画などでは定冠詞の替わりかと思えるほど，名詞の前に乱発される語ではあるが，裕福な中流家庭を題材にした作品でこれほど頻発されるのは珍しいのではないだろうか。とくに30歳の主婦ポーシャに8回も'fuckin''を叫ばせているのは，かなりインパクトを持つだろうと思われる。いくら，この卑語が日常会話にとけこみ，本来の価値が下落しているとしても。

その他の顕著な語法としては，主語の省略の頻発が挙げられる。文脈で理解できるとはいえ，命令形と判然としなくなり，外国語学習者泣かせの表現である。また，一種の母音連続 (hiatus) なのか，不定冠詞を次の語頭母音とリエゾンしない場合——'a angel's name' (210) 'like a aria' (219) ——がときおり見られる。

アイルランド中部地方方言の発音の問題もある。幕開きのラフィアルの台詞「朝10時だというのに，もう（一杯）やっとるのか」は，テキストではほぼ標準的英語——'Ten o'clock in the mornin' and you're at it already.' (193) ——で書かれているのだが，フィンタン・オトゥールは初演の際に彼の耳に聞こえた台詞として'Tin a' clache i'tha mornin' an ya'are ah ud arready.'[43]と書き起こし，素面と酩酊の区別のつかない緩慢な口調の発音だったと記している。マリーナ・カー自身が中部訛りについて「テキストに趣きは出しておいたけれども，中部訛りは書き言葉が許す以上に，暴れて手に余るもの (rebellious)」(192) というから，土着の灰汁(あく)の強い台詞回しをわれわれは思い描かねばならないのだろう。

テキスト

テキストは下記の版を使用し，拙訳引用末尾の括弧内に頁数を付した。

Marina Carr, *Plays One* (London: Faber and Faber, 1999).

注

1）日本におけるマリーナ・カー研究の先駆者で作品翻訳もある舟橋美香先生は，日本語表記として「コクラン」を当てている。ネットから得た劇評（1999年1月27日執筆）のなかには，この固有名詞に括弧付きでCock-linを添えて，発音が「コクリン」であると明示するものもある（http://www.princetoninfo.com/199901/90127p03.html　2006年1月4日取得）。'Coughlin'であれば，米国のカトリック司祭に，辞書では「コグリン」という表記（発音記号では「カグラン」に近い）の人物がいる。筆者も音訳に迷ったが，「咳」の'cough'からの類推（もちろんCoughlanのgh部分は［f］ではないが）と，この姓名の異形にCohalanがあることから，咽喉音に「フ」を用いた。異形の綴り字からすると「コハラン」「カハラン」でも良いのかも知れない。訳語の定着まで，仮に「コフラン」としたい。

「ケープ」「頭巾」を意味する古アイルランド語'O Cochlain'の英語表記であるこの姓名は，アイルランド共和国ではよくあり，主に南部のコーク州と（作品の舞台である）オファリー州で多く，後者では19世紀までは大土地所有者によく見られる名前だったとされる。すなわち，外国人である我々は，この名前が現実にアイルランド中部で多い名前であり，かつ，スライがそうであるように，大地主を連想させることを知識として押さえておけばよいだろう。Ida Grehan, *The Dictionary of Irish Family Names* (Boulder, Colorado: Robert Rinehart Publishers, 1997), p.70.

2）ロッド・スチュワート（Rod Stewart, 1945-）の1971年のヒット曲に同名のフォーク・ロック調の曲がある。アメリカ映画『ジョン・レノン・ストーリー』（*In His Life: The John Lennon Story,* 2000）では，初めてギターを買ってもらったレノンが，母親のバンジョー伴奏とともに教わる曲の歌詞に「マギー・メイ」が登場する。

3）オランダのヘイグとロッテルダムの中間に位置する市の名前にちなむ，スズ釉の彩色陶器。白地に青の模様が多い。Peter Francis, *Irish Delftware: an illustrated history* (London: Jonathan Horne Publications, 2000) には様々な陶器の写真が掲載されているが，ポーシャが貰ったような，馬をかたどった装飾品は見当たらない。

4）「4歳で就学」は早すぎる感じがあるが，アイルランドでは「4歳になると初等学校付設の幼児学級に入ることができる。対象は，Junior Infantsが4～5歳，Senior Infantsが5～6歳」で，「ほとんどの子どもは6歳以前の幼児学級から就学している」（下記アドレス①による）とのことであり，クィンティンの通う学校とは，義務教育としての初等教育でなく，この幼児学級かと思われる。なお，国は英国で異なるが，北アイルランドでは「小学校就学年齢は，日本の幼稚園の年齢にあたる四～五歳です。（中略）学年の最終日までに満五歳になる子供が一年生（プライマリー・ワン）のクラスに入るということです。こちらは普通九月一日に新学年が始まり，六月終りまでが一年生となりますから，六月生まれの子供は四歳のまま小学校一年生をするということになります」（同②による）と，極めて明快に4歳児の就学が可能であることを説明している。

①http://www.joes.or.jp/world_school/world_school.cgi?cmd=dp&num=50200Tfile=U...
（2006年1月6日取得）

②http://homepage3nifty.com/Keiyaku/sakusaku/4 1.htm　（2006年1月6日取得）

5）アイルランドでは結婚に際して，新婦の側から持参金を提供することが風習としてあり，アイルランド人作家ウォルシュ（Maurice Walsh）の短編小説（1933）をもとに映画化された『静かなる男』（*The Quiet*

Man, 1952）では，ジョン・ウェイン（John Wayne）演ずるショーン・ソーントンの求愛を受け入れるために，モリーン・オハラ（Maureen O'Hara）演ずるメアリー・ケイト・ダナハーが苦心する様子がユーモラスに描かれている。新婦持参金慣習が，この映画から半世紀過ぎた現在も続いているかどうかは不明であるが，スライの保守的価値観を表しているとも考えられる。この点は，日本ケルト会会員の中山富貴子さんのご教示による。

6）ジョン・マコーマック（John McCormack, 1884-1945）は1884年6月14日，ウェストミース州アスローン（Athlone, Co. Westmeath）生まれ。地元のマリスト修道会の学校，スライゴウのサマーヒル・カレッジで学ぶ。1902年ダブリンのFeis Cheoilのテノール部門で金賞を受賞。イタリアでサバティーニ（Sabatini）に師事し，1907年コヴェント・ガーデンで『カヴァレリア・ルスティカーナ（田舎騎士道）』（*Cavalleria Rusticana*）でオペラ・デビューを飾る。1911年にはソプラノ歌手メルバ（Dame Nellie Melba, 1861-1931）とともにオーストラリア公演を行い，1919年，ニュー・ヨークのマンハッタン・オペラ・ハウスでの『ラ・トラヴィアータ（椿姫）』（*La Traviata*）に出演（この年，アメリカ市民権を獲得）。以後，抒情派テノール歌手として一世を風靡する。500枚以上のレコード録音を果たし，いずれも着実な売れ行きをあげた。カトリック教会の慈善活動への多大な貢献を認められて，1928年にはローマ法王から世襲の伯爵位を受けている。『ポーシャ・コフラン』のなかでブレイズが何度もマコーマックを「伯爵」と呼んでいるのはこのためである。1945年9月16日，ダブリン州ブーターズタウン（Booterstown）の自宅で死去。妻はダブリンの歌手リリー・フォリー（Lily Foley）で，3人の子どもをもうけた。[Henry Boylan (ed), *A Dictionary of Irish Biography: Third Edition* (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), p. 238.]

筆者の手元にあるCD "John McCormack sings Irish Songs"（FATCD 298）には"Annie Laurie", "Wearing of the Green"などとともに，"Macushla"が収められている。「マクーシュラ」という名前は，クリント・イーストウッド監督・主演映画『ミリオンダラー・ベイビー』（*Million Dollar Baby*, 2004）では，女性ボクサーのマギーのガウンに縫い込まれ，話の中では謎のアイルランド語として重要な役割を演じることになるのだが，見方を変えれば，マギーはこのアイルランド歌曲を聞いたことがなかったことを物語る。

7）北アイルランド，アントリム州のオールド・ブッシュミルズ蒸留所で生産されている銘柄で，標準的な白ラベルのブッシュミルズ・オリジナルと比べて，プレミア版。「当たりが重厚で，口の中でとろけるような感触」があり，「シェリー（オロロソ）[Oloroso] の香りもほのかにして，ふくいくとした味わい」があるという。[武部好伸『ウイスキーはアイリッシュ—ケルトの名酒を訪ねて』（淡交社，1997年），p.119.] 手持ちの「ブラック・ブッシュ」の箱に記載されている能書きによれば，もともとは'Old Bushmills Special Old Liqueur Whiskey'なる長い名前であったため，愛好家たちからは黒ラベルにちなんで「ブラック・ブッシュ」と呼ばれていたという。アルコール度数，43%。劇中のブレイズが好んだこの銘柄は，けっして安酒ではないことが分かる。

8）取り替え子とは，「さらわれた赤ん坊の身代わりに置いてゆかれる妖精であり，皺くちゃで，不気味な姿であるとされ」，「妊婦をはじめとする成人も，時に連れ去」り，「その際，さらわれた成人と瓜二つの姿をした妖精が，死体のまねをして人間を欺こうとすることが多い」という。[下楠昌哉（しもくすまさや）『妖精のアイルランド—「取り替え子（チェンジリング）」の文学史』（平凡社，2005年），p.17.] しかしながら，総じて，取り替え子の挿絵は，「どれも狡猾そうな老人の顔をした赤んぼう」である。[大江健三郎『取り替え子（チェンジリング）』（講談社文庫，2004年）[親本は2000年刊]，p.374.] テキストを読む限りでは，ゲイブリエルにしろポーシャにしろ，とくに異様な外貌で生まれたという記述はなく，ブレイズの主観的な嫌悪感がこもる印象にすぎないと思われる。

9）高価な買い物の支払いでも通常20ポンド紙幣を用いるため，普段はめったに使用されない高額紙幣。筆者は1984年の留学時，1度だけこの大判の皺くちゃな紙幣を銀行窓口で受け取り，書店で使ったところ，女店員が驚いて珍しそうに掲げて見ていたのを覚えている。ユーロに通貨統合したアイルランドでは，これから新作芝居では「ポンド」表現が徐々になくなっていくだろうが，一抹の寂しさを感じる。

10）天羽幸子（あもうゆきこ）『ふたごの世界—双生児の二十五年間の追跡研究』（ブレーン出版，1988年），pp.15-16.

11）小島潤子（こじま）『双生児（ふたご）の内的世界Ⅰ　自己（セルフ）と影（シャドウ）—破滅と変容の象徴として』（文芸社，2003年），p.21.

12）詫摩武俊，天羽（あまう）（ママ）幸子，安藤寿康『ふたごの研究—これまでとこれから』（ブレーン出版，2001年），p.392.

13）E.フラー・トリーほか（岡崎祐士　監訳，岡崎万紀子　訳）『ふたごが語る精神病のルーツ』（紀伊國屋書店，1998年），p.39.［原著名E. Fuller Torrey (et al), *Schizopherenia and Manic-depressive Disorder: The Biological Roots of Mental Illness as Revealed by the Landmark Study of Identical Twins* (Basic Books, 1994)］

14）ジョセフ・ハンドラー（田辺貞之助　訳）『ヒューマンライフ　エンサイクロペディア11　性の調和・妊娠・出産』（講談社，1972/74年），p.92.

15）加来隆一『お産のはなし—正しい知識と心得』（同文書院，1984年），p.131.

16）『医科学大事典　第29巻』（講談社，1983年），p.230.

17）東京大学教育学部附属中・高等学校（編）『双生児—500組の成長記録から』（日本放送出版協会，1978年），p.22.

18）『ふたごが語る精神病のルーツ』，p.40.

19）上掲書，p.44.

20）『ふたごの研究—これまでとこれから』，p.393.

21）『ふたごが語る精神病のルーツ』，p.42.

22）『ふたごの研究—これまでとこれから』，p.235.

23）『お産のはなし—正しい知識と心得』，pp.134-135.

24）『双生児（ふたご）の内的世界Ⅰ　自己（セルフ）と影（シャドウ）—破滅と変容の象徴として』，pp.193-194.

25）ピーター・ヘイニング（阿部秀典　訳）『図説　世界霊界伝承事典』（柏書房，1995年），p.162.［原著はPeter Haining, *A Dictionary of Ghosts,* 1982.］

26）ジョン・ロナー（鏡リュウジ・宇佐和通（わつう）　訳）『天使の事典—バビロニアから現代まで』（柏書房，1994/96年），p.62.［原著はJohn Ronner, *Know Your Angels: The Angel Almanac with Biographies of* 100 *Prominent Angels in Legend & Folklore, and Much More,* Mamre Press, 1993.］

27）『ふたごが語る精神病のルーツ』，p.28.

28）内田亨（監修）『学研ハイベスト教科事典　動物の世界』（学習研究社，2001年），p.302. なお，母川回帰本能については，「地磁気を感知する能力がある」こととや「川のにおいを記憶」しているためとされる。

29）『天使の事典—バビロニアから現代まで』，p.268.

30）上掲書，pp.269-270.

31）バーバラ・ウォーカー（山下主一郎ほか訳）『神話・伝説事典—失われた女神たちの復権』（大修館書店，1988年），p.808.［原著はBarbara G. Walker, *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets* (Harper & Row, 1983)］

32）映画『やさしくキスをして』パンフレット（シネカノン，2005年），p.6.

33）*The Dictionary of Irish Family Names,* p.229.

34）Edward MacLysaght, *The Surnames of Ireland* (Blackrock, Co.Dublin: Irish Academic Press, 1989),

p.133.

35) *The Dictionary of Irish Family Names,* pp.173-174.

36) *The Surnames of Ireland,* p.266.

37) 高橋康也（編）『シェイクスピア・ハンドブック』［新装版］（新書館，2004年），p.150.

38) 高橋康也・大場建治・喜志哲雄・村上淑郎（編）『シェイクスピア辞典』（研究社，2000年），p.596.

39) 第2幕は未来を先取りして提示する「フラッシュ・フォーワード」（flash-forward）の手法である，と面白い発想の転換をして指摘する論者（Christopher Rawson）もいる。http://www.post-gazette.com/magazine/20010328portia7.asp （2006年1月4日取得）

40) Nicholas Grene and Chris Morash (eds.), *Irish Theatre on Tour* (Dublin: Carysfort Press, 2005), p. 183.

41) Julia Furay and Redmond O'Hanlon (eds.), *Critical Moments: Fintan O'Toole on Modern Irish Theatre* (Dublin: Carysfort Press, 2003), p.166.

42) Medb Ruane, 'Shooting from the Lip: Review of *Portia Coughlan, Sunday Times,* 31 March, 1996' in Cathy Leeney and Anna McMullan (eds.), *The Theatre of Marina Carr: 'before rules was made'* (Dublin: Carysfort Press, 2003), p.83.

43) *Critical Moments: Fintan O'Toole on Modern Irish Theatre,* p.165.

参考文献

ジョン・ラッシュ（佐伯順子　訳）『双子と分身—＜対なるもの＞の神話』（平凡社，1995年）

安藤寿康『心はどのように遺伝するか—双生児が語る新しい遺伝観』（講談社，2000年）

『カラー図説　医学大事典』（朝倉書店，1985年）

ジョルジュ・サンド（宮崎嶺雄　訳）『愛の妖精』（岩波文庫，1936/2005年）

ハックスリー（松村達雄　訳）『すばらしい新世界』（講談社文庫，1974/75年）

マーク・トウェイン（村川武彦　訳）『まぬけのウィルソンとかの異形の双生児—マーク・トウェイン・コレクション①』（彩流社，1994年）

エーリヒ・ケストナー（高橋健二　訳）『ふたりのロッテ』（岩波書店，1962/93年）